

# 脳梗塞 再生医療で治療へ

頭蓋骨の細胞培養 ↓ 本人に投与

広島大大学院医系科学研究科（広島市南区）の研究チームは26日、脳梗塞患者の頭蓋骨から培養した細胞を本人の体に投与する再生医療の臨床研究を始めると発表した。脳神経の回復を促し、体のまひなどの後遺症を軽減する効果が見込めるという。

厚生労働省が19日に承認した。研究対象は重い脳梗塞を発症し、脳圧を下げるための開頭手術を受ける患者6人。手術時に外した頭蓋骨を少量使い、6週間かけて「間葉系幹細胞」を培養する。この細

## 後遺症の軽減期待

胞はさまざまな組織に分化できる能力を持つ。約1億個分の細胞が入った液体を本人の静脈から点滴する。2023年末までに効果を検証する。

脳梗塞患者向けの再生医療は札幌医大などが先行しており、腸骨から取った骨髓液を使う場合が多い。広島大の研究チームの栗栖薫教授（脳神経外科）は「動物実験では、頭蓋骨由来の細胞を使った方が運動機能の回復が大きかった。頭蓋骨を使う研究は世界初。効果を証明し、他の脳の病気や脊髄損傷などにも応用したい」と話す。

日本では年約30万人が脳梗塞を含む脳卒中を発症。寝たきりや認知症などの原因にもなり、共同研究者の弓削教授（基礎生命科学）は「完治を願う患者や家族の希望の光になれば」と強調する。

再生医療に詳しい大阪大の紀ノ岡正博教授は「一般的に使われる骨髄由来の細胞でなく、患部に近い頭蓋骨の細胞を使うと効果がどう出るか注目したい。治療に使える新たな細胞を探すことにもつながる」と評価している。

（田中美千子）



脳梗塞治療の新たな臨床研究について説明する栗栖教授⑤、弓削教授④たち研究チーム